



-8-

津 守 眞

ヨハネスバークの悲劇のことども

今、アメリカの心ある人々の中で関心の的になっている問題の一つに、南中央アメリカのヨハネスバークの黒人問題がある、或いは日本でも周知の事実かもしれないがアメリカのニグロの問題も現代尙生きた問題であるがヨハネスバークの問題はそれ以上である。此処に金とダイヤモンドの鉱脈が発見されて以来ヨーロッパ各地特にオランダから金を目あてに殺到した人々が数百年來住んでいる、彼らは土着の黒人を駆り立て、金の採掘に使役しその給料は生活の資を充すに足りず、ヨハネスバークの黒人労働者の居住地は貧困を極め道徳頹廢し、

悲惨を極めている。

これに反し白人、所謂ホワイト・ピープルは豪奢を極めた生活をし黒人とは別世界を作っている。ダッチ・リフォーム (Dutch Reform) というクリスト教会が白人の教会であるが、このドグマによれば黒人は白人より劣等に作られている故別々に扱わねばならぬという大変なクリスト教もあつたものである。勿論法律によつて一切が区別され、結婚は勿論黒人が白人のものを侵した時は苛酷な刑が規定され政府は白人のみを保護して、黒人には教育費福祉費は一切出さない。政府の方針は明白に黒人を誅求し、白人を肥せといふのである。しかもヨハネスバークの人口構成は黒人が大多

数で白人は少数なのである。

これらの事はヨハネスバークで仍らいてきたアメリカ人のミッシェンの人から聞いた話、多数のミッシェンがヨハネスバークの黒人の中に混つて働き、この窮状を打開しようとしている。乍而、暗黒大陸の中にかくまわれた大都市ヨハネスバークは世界の別天地なのである。私の接する限りのミッドウエストの中流階級は、これらの白人に非常な憤りを感じている、ヨハネスバークの一黒人牧師によつて書かれた「City, the Beloved Country」という本がある。非常な悲劇の実話が盛られている。

日本で訳されているかどうか知らないが今、こゝでは大流行である。最近この本に基いて同名の映画が出来、ミネアポリスで評判になつている大へんによく出来た映画である。

今まで数百年つゞいて来たにも拘らず世界の大衆の眼からかくされていた不義が明るみに出されつゝあるといふことは非常によい事である、現代このような黒人差別待遇酷使が公然と行われているなどということは殆んど信じ難いことであるから、乍而

もう一歩更に考えてみよう。一体このよう
な事実を知った者が誰しも黒人に同情を感
じ、白人に憤りを感じる。それは人間の情
である。けれども誰がこんな風にしたので
らう。恐らく最初の白人達は金に目がくら
んで殺した人々、そして黒人の単純な部
落をめちゃ／＼に破壊して恥じなかった人
は責められるに値しよう。けれどもその子
供、孫達、又その孫達はこのような黒人か
ら一切きりはなされて教育され、育ち、そ
していつか知らぬまに大人になって黒人の
支配者の位置にある自らを発見する。アフ
リカ輿地のヨハネスバークの白人の血をつ
いで生れたばかりに、かくも恐るべき立場
に立たされている、たとえその問題に気づ
いたとしても祖先伝来、うけつがれてきた

社会構成は個人の力をこえて、個人をその
社会の奴隷にしてしまう、その白人達も又
奇しきめぐり合せと云い得るのではなから
うか。この正月の休みに、ミズリー州のパ
ーリヴィルという町で、アメリカ中の新教
の学生の大会が一週間あり参加した会衆三
百人位の中に外人学生が四十人ばかり、お
り、その中にヨハネスバークから来た白人

のオランダ系の女の学生がいた、中々威勢
の良い元気な人でよくしゃべったり議論し
たりしていた。

会の終る頃になって知ったら、この女子
学生が黒人の圧制者たるヨハネスバークの
白人だというわけである。他のアメリカ人
の女の子或いは日本人の女の子と大した変
りがあるわけではない、より残酷だったり
無慈悲だったりするわけでもない。全く同
じ人間なのである。かく生れついた白人も
又気の毒なわけである。さればと云って、
黒人の窮状を見逃してい、というわけでは
ない、われ／＼日本人にとっては世界の最
も果ての出来事であつて、我々には直接縁
遠いこと、云ってすませられる問題であら
うか。

アメリカのニグロの問題、これはヨハネ
スバークの問題とは比較にならないが、し
かし未だに大きな問題である。南部の差別
待遇は周知の問題であらうが、この北部で
も時々、食堂でニグロに給仕することを拒
否したり、隣の家でニグロの家庭が引越し
てくるのを拒否したりという話を聞くのは
珍らしくない。

これが商売取引、職業の問題になると尙
更である。州立大学でニグロの入学を許さ
ない所が一杯ある。教会ですらも一体ニグ
ロには人間として白人より劣等であるとい
うのであろうか。心理学はそれを否定して
いる。

勿論我々常識としても、人間皆優劣はな
いと考える。白人にも頭の良いのから悪い
のまであるし、ニグロにしても同様であ
る。

ニグロであるが故に劣等であるなどとい
う論理は成り立たない。今アメリカに来て
いる外国人学生は、皆アメリカでニグロの
問題を見て、憤慨する。それは当然であり
斯くあるべきである。アメリカ人自身のこ
の問題に対する反省というのも一九四〇年
以来、急速に進んでいるミネアポリスでは
市長評議会の中に人種問題解決評議会とい
うのが一九四〇年以來組織されており、ニ
グロのみならず各人種に対する偏見と不公
平を除くために極めて活潑に努力してい
る。それらの評議員というのが、我々と始
終顔をつき合せている家庭の主婦だったり
大学の先生の奥さんだったり、牧師さんだ

ったりするのであるから、面白い。昨年と今年と二年に亘って、この市長評議会の議長を努めているのが北川台輔氏という、ミネアポリスの日本人教会の牧師さんで、市民権も持たないのに市長の直接諮問機關の議長をしているわけであるから一寸珍らしい。これらの運動については稿を新めてお話しねばならない。さて、アメリカを訪問する多くの人が、アメリカの人種問題を攻撃するのであるが、日本の国でも同じ事が行われ、又行われようとしている事を我々ははつきり認識しているであらうか。朝鮮人に悪いことは何でもおしつけてしまったり。或いは又最近の黒人或いは白人混血児の問題はどうなることだろうか。

戦後の産物として出来た父なき子であるが故に、或はもと／＼の日本人とは異った髪と皮膚と目の色を持って生れて、きたその故にその子供は白眼視されなければならぬのだからか。この子供達が育ちつ、ある。そして自己を見た時に青年期になって煩悶するに違いない。この子供達に社会は尙その上白い眼を向け、教育の道を限り、職業の道を限るだろうか。社会が白眼を

もって受け容れ、励ましてやれるだろうか。日本の社会で。

幸に、私達のこの問題は、今社会の人々

が気がついて出来る限りのことをしてゆけばまだおそくはない。近所の家に、混血児をかくしている家はないだろうか。学校でいじめられている混血児はないだろうか。

近所でひそやかにとやかや陰口をきいて

いる人はないだろうか。皮膚の色が違っても髪の色が違っても、同じ心を持った人間である。

これらの子供達を受けいれられるか否かという事は、日本がこれから世界に立つてゆけるか否かという問題の鍵がかくされて

（お茶の水女子大学講師）

（23頁より続く）

「自由打ちのリズムあそび」「二拍子、四拍子、三拍子の拍手

打ち」などに順序よく進んで、一学期中にこれらのことが「やや完全」に指導されていれば二学期中には幼児達の身についた完全な指導効果が得られるわけです。そして三学期には相当程度の高いリズム打ちや、分奏、の指導にも入れるし、動きのリズムも音楽によく反応した自由表現が楽しくできるようになつてきます。こうした順序を立てての計画的な指導をうけたものが家庭生活にも音楽的な環境に恵まれて成長し、三学期の遊ギ会や学芸会などにすばらしいできばえを見せたからといって「幼稚園にしてはうますぎる」とか「幼稚園で尤ずかしいものをやっている」などと批評するのはまちがいで音楽的環境に恵まれた者と、恵まれない者の差は、他の生活とはくらべものにならないほどの個人差をもたせたり又性格の上にも、生活態度の上にもいろいろと影射のあることを考えるとき、音楽リズムの指導には常に苦心を必要とすると同時に先生自身の音楽的研究が必要とされるわけです。

◎註（實際例の三つはあくまでもサンプルで一つの方法をなんべもくりかえさぬよう、このような指導法を沢山に用意されるようにくれぐれも御注意願います）

（東京都文京区立第一幼稚園長）